

平成23年度事業報告について

1 はじめに ～協会発足以降の取り組みと成果～

平成22年度に博物館協会が発足し、大阪文化財研究所および大阪歴史博物館、大阪市立自然史博物館、大阪市立美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪城天守閣の1所・5館の一元的な管理運営を行うことにより、コスト削減と施設統合の集積、連携効果を活かすことでの事業拡大を図ってきた。これらの文化財調査機関を含む複数の博物館・美術館は、多様なジャンルからなるとともに、長年に亘る活動実績と信用から各々が充実した内容を誇り、一都市としては全国でも傑出した「博物館群」を形成している。

また発足初年度より、当法人の事業が公益事業と判断できるとともに、今後も開発者や寄贈・寄託者からの信頼確保、税制上の優遇措置の確保が不可欠であることから、公益法人化を目指し、平成24年4月1日には公益財団法人に移行した。

この間の主な取り組みとその成果は以下のとおりである。

大阪市が平成19年度から、「80N（エイトオン）」（協会各館に大阪市立科学館、天王寺動物園、大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室を加えた8施設）として共同事業を実施してきたが、平成22年度からは協会事業として実施した。また、各館・研究所が同じ法人に管理運営されることにより、新たに相互の連携を進めることができた。

複数館が共同で行った事業としては、平成22年度に自然史博物館特別展「みんなでつくる淀川大図鑑」と大阪歴史博物館特別展「水都大阪と淀川」の開催に伴い、共同して大阪市立中央図書館で淀川関係の展示を行った。平成22年度に大阪城天守閣と大阪歴史博物館の共通観覧券を発行したが、平成23年度には、大阪城・エッゲンベルグ城友好城郭提携3周年記念として、大阪城天守閣と大阪歴史博物館が合同自主企画特別展「日欧のサムライたち」を開催したことが特筆される。

また、協会を事務局として競争的外部資金を取り入れた連携事業も実施し、協会内部の連携のみならず、市民団体等ともさまざまな形で連携する事業展開を実現している。

博物館事業の評価については、平成15年の「公立博物館の設置及び運営上の望ましい基準」の改正で従来の自己評価に加え、外部有識者による評価とその結果に基づく事業の改善とその公表に努めるように明記された。協会発足当初の平成22年度に5名からなる外部評価委員会を設置し、各館・研究所の事業に対する評価を実施している。各館個別ではなく、協会に外部評価委員会を設置したことで、効率的な委員会の運営を行うことができた。また、委員会審議に各館の職員が参加することで、評価の過程、委員の意見を各館で共有することができ、各館の事業展開にその成果を反映することができた。

市内小中学校との連携を図るため、校長会等を通じて博物館・美術館事業の案内、周知を行うとともに、各学校へも直接働きかけ、学校との連携を進めることができた。平成22

年度からは、基礎資料作成のため、各館の小中学校の入館状況や学校関連事業の調査を行い、各館の傾向を分析している。また、平成 22 年度末に大阪市立大学との包括連携協定を結び、キャンパスメンバーズ制度の導入のほか、「市民大学講座」（4 回シリーズのうち 2 回担当）や 2 度にわたるシンポジウムの共催、大阪市立大学の「都市問題研究」への参画などを行っている。

大阪市イベントとの連携として、平成 22 年度の「ルーシー・リー展」（東洋陶磁美術館）では、「光のルネサンス」の期間中、来場者に向けて館のライトアップ、大型懸垂幕、オープンテラスなどにより、展覧会の情報発信と館の魅力の創出を行った。結果、過去最大級の入場者数 5 万 6 千人と 1 日当たりの入場者 1700 人（過去最高）を記録した。また、平成 23 年度の市立美術館においては、天王寺公園内の「オオサカ オクトーバーフェスト」との連携を図り「岸田劉生展」の広報や夜間開館時間延長を行った。

平成 22、23 年度の 2 カ年において以上のような主な取り組みを行い、展覧会事業の連携以外にも、外部評価や研修を複数館でまとめて行うことにより効率化を図ることができた。また、大阪市立大学との包括連携では、今後の事業の多様化、各館学芸員による博物館関連講座への出講など、より深い連携を進めている。広報についても、広報媒体の見直し、ホームページの充実に取り組んでいる。

2 大阪文化財研究所事業

発掘調査・報告書作成を合わせた受託事業額は昨年度に比して減少したが、件数は近年になく多かった。主な調査には難波宮東方官衙・大坂城跡天守閣山里丸などがある。また、保存処理の受託事業量は件数、額ともに大きく増大した。

こうした状況には、本年度から開設した東淀川区東淀川調査事務所と生野区保存科学室を円滑に運営することで対応することができた。

1. 埋蔵文化財の調査及び報告書作成

(1) 発掘調査事業（〔 〕は昨年度、個別の事業は一覧表参照）

平成23年度の発掘調査は契約件数156件〔138〕件、調査面積16,202〔33,425〕㎡、受託額563,281,094〔1,180,150,025〕円（税抜）であった。前年比で受託件数は113%に増加しているが、面積は48.5%、金額は47.7%にとどまり、総じて1件あたりの事業規模が昨年度に比して大幅に縮小している。報告書作成受託収入と合わせた委託相手別の金額比率は、大阪市関係が65.00%〔62.61%〕（76〔70〕件）、大阪府関係が0.00%〔0.36%〕（0〔1〕件）、国が8.98%〔25.26%〕（6〔5〕件）、民間が26.02%〔11.77%〕（108〔80〕件）となった。大阪市からの受託額は22年度の総額約7億9千8百万円から、23年度は総額約4億8千1百万円強に減少したものの、引き続き最大の受託先であった。また民間事業者からの受託額は約1億9千3百万円弱で、昨年度に比して増大した。

	発掘調査受託事業				報告書作成受託事業			合計	
	件数	面積	受託額		件数	受託額			
国関係	3	495	53,074,000	9.42%	2	13,430,000	7.58%	66,504,000	8.98%
大阪府	-	-	-	0.00%	-	-	0.00%	-	0.00%
大阪市	47	7,292	317,559,553	56.38%	30	163,698,000	92.42%	481,257,553	65.00%
民間	106	8,415	192,647,541	34.20%	2	※	0.00%	192,647,541	26.02%
合計	156	16,202	563,281,094	100.00%	34	177,128,000	100.00%	740,409,094	100.00%

おもな調査成果には、難波宮跡・大坂城跡に関連するものがある。難波宮中樞部の東方官衙では、3か年にわたる史跡整備事業によって奈良時代のなかで建て替えられたと見られる建物の基壇跡を確認することができ、『続日本紀』にいう東南新宮との関係が注目されている。大坂城跡では、特別史跡整備事業で徳川期大坂城の大規模な石組集水枡のほか、豊臣期大坂城の金箔押瓦等を確認した。

これらの調査成果は新聞報道（3回）、発掘調査現場の公開（難波宮跡1回、大坂城跡2回）のほか、大阪歴史博物館での遺物やパネルなどによる展示を通じて広く公開された。なお、大坂城跡の1件（OS11-16次）は、平成4年度以前に3次にわたって調査を行った後にいったん埋め戻し、本年度に未調査部分を含めて再調査する計画であったが、調査開始以前の機械掘削時に遺構面が削平され、豊臣期の有力大名に係る重要な資料が失われた。3月24日に開催された現地説明会では掘削を担当していた大阪市教育委員会から経緯の説明が行われた。

そのほか、縄文時代では阿倍野区播磨町遺跡で大阪市内最古級の早期に属する押型文

土器が、旭区森小路遺跡で中期末～後期初に属する土器が見つかった。弥生～古墳時代では、城東区榎並城跡出土の朝鮮半島から搬入された無文土器や東住吉区酒君塚古墳出土の弥生時代前期土器がある。古代では東住吉区難波大道跡や大坂城跡で建物跡が見つかったほか、難波宮中枢部東側の谷からは宮殿以前に遡る瓦片が確認され注目される。中世では、阿倍野区阿倍寺跡で寺域に係るとみられる溝が見つかった。近世では中之島周辺における中之島蔵屋敷跡・福島蔵屋敷跡・江戸堀蔵屋敷跡など大阪市ならではの蔵屋敷関連調査のほか、大坂城跡の背割り下水の調査、馬喰町遺跡の墨生産に係る調査など、近世都市の構造解明や手工業生産に関連する資料を得ることができた。

(2) 報告書作成事業

平成23年度は合計33冊の報告書を刊行した。平野区长原遺跡（22～24巻・東部地区15巻および編集のみ16巻）、中央区大坂城跡（12～13巻）のほか、天王寺区上本町遺跡（3～4巻）、中央区難波宮跡（17巻）、住吉区南住吉遺跡（4巻）、東淀川区西淡路1丁目所在遺跡（2巻）、旭区森小路遺跡（2巻）、住吉区山之内遺跡（5巻）などは従来調査報告書に巻を重ねた。一方、淀川区東三国2丁目所在遺跡、北区佐賀藩蔵屋敷跡・茶屋町遺跡・曾根崎遺跡・中之島蔵屋敷跡、都島区網島町遺跡、中央区難波1丁目所在遺跡B地点、浪速区恵美須遺跡、生野区中川遺跡、天王寺区難波京朱雀大路跡・摂津国分寺跡、東住吉区矢田部遺跡B地点・今林遺跡、平野区加美正覚寺遺跡・平野環濠都市遺跡・喜連西遺跡などは、新発見遺跡や従来詳細が不明であった遺跡などの調査報告書を刊行し、大阪市域の新たな遺跡情報を公開したものである。なお、東住吉区荻田9丁目所在遺跡・平野区平野馬場遺跡・浪速区三島遺跡・福島区福島蔵屋敷跡については、発掘調査受託経費で報告書作成も行った。このほか過年度調査（28件）の報告書作成作業を行った。

2. 文化財関連施設の管理受託

昨年度に引き続き、難波宮史跡公園及び5世紀代建物の管理および公開を行ったほか、平野区大阪市埋蔵文化財収蔵倉庫に加え、新たに本年度から東淀川区東淀川調査事務所および、西淀川区西淀川収蔵倉庫、此花区常吉収蔵庫における収蔵遺物の管理業務を行った。

難波宮史跡公園の管理と公開では、合計9回、約300人に対して案内・解説を行ったほか、5世紀代建物の管理および案内業務を行った。その中にはガールスカウト日本連盟大阪府支部の史跡公園清掃奉仕（5回約200人 [197] 人）や、市内小中高校生の案内（4件102人）などがある。

本年度は大阪市埋蔵文化財収蔵倉庫から新規の常吉倉庫へ8,489個、西淀川倉庫へ1,774個を搬出したほか、東淀川調査事務所から報告書の作成終了に伴って大阪市埋蔵文化財収蔵倉庫へ140箱、常吉倉庫へ150箱を搬出した。以上のような大規模な移動作業を行うとともに、収蔵資料の系統的整理を行って、資料の貸出しや閲覧などに対応できるよう引続き記録整理を行っている。

3. 文化財の保存処理・分析

大阪市内発掘調査の出土品に対して蛍光X線分析による成分分析や保存処理を行ったほか、昨年度に採取していた古墳時代初期須恵器上町谷窯の断面剥取りや本年度採取した大坂城跡の豊臣期鍛冶炉の遺構剥取り転写などを加工して大阪歴史博物館の特集展示で展示した。

そのほか、大阪歴史博物館の館蔵品修復をはじめ四天王寺・八尾市・藤井寺市など大阪府下6件、大阪府以外の近畿圏5件、その他松阪市・海津市教委・総社市教委・(財)広島市未来都市創造財団・(公財)松山市文化スポーツ振興財団・(公財)高知県文化財団・高知市教委・高知大学・島根県教委・大田市教委・長崎市など18件の事業を受託した。以上の保存処理・分析業務の受託額は30,703,020 [11,211,900] 円であった。

4. 文化財の普及啓発

(1) 講演会・シンポジウム

大阪歴史博物館において「金曜歴史講座」を開催し、4回ずつ3シーズン(12回)にわたり計1,555人[12回1,513人]の参加を得た。本年度は難波宮大極殿発見50周年を記念して、第1シーズンは難波宮調査の黎明期から従事されている方4名に講師となって頂いた。また、科学研究費補助金基盤研究(A)による研究公開事業として『シンポジウム大阪上町台地から都市を考える』の「都市と自然の歴史学—弥生時代から難波宮—」を開催し、120名の参加者があった。大阪歴史博物館と共催で毎年行っている特集展示「新発見! なにわの考古学2011」に合わせて開催した『大阪の歴史を掘る2011』講演会では160名の参加を得た。

(2) 文化庁補助金事業

当研究所も構成団体に加わって「なにわ活性化実行委員会」を組織し、文化庁の「平成24年度文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」に応募し採択された事業を推進した。事業名は「地域の博物館や文化資源を活用した「上町台地」の魅力発信による観光振興・地域活性化事業」で、難波宮跡など上町台地と周辺の文化遺産を広く周知し、市民団体や地域住民と協働して各種のイベント等を開催することで地域の活性化を図るものである。

本事業では主に大阪歴史博物館で行う事業とそれ以外の事業があり、当研究所では後者にあたる①「博物館連携強化による地域文化資源情報の発信(『なにわまナビガイド』サイトを開設し、上町台地周辺の文化遺産スポット150件以上をWeb公開)」、②「地域の文化資源を活用した普及事業(「難波宮フェスタ! 2011」: 参加市民団体14、参加者2,290人・『難波宮大極殿発見50周年記念シンポ 百花斉放』: 参加者712人・『なにわの宮リレーウォーク』: H23年度分参加者3回計545人)」を担当した。本事業は3年間継続の予定であり、2年目の平成24年度も引き続き事業を行う予定である。

(3) 地域講座と地域連携

外部団体からの依頼で、当協会が企画し講師を派遣した連続講座として、大阪市教育振興公社「いちよう大学大阪の歴史と考古学(専任講師を含む)」(13回: 旭区)、平野区誌出版記念連続講座「わがまち平野区そのなりたちを学ぶ」(5回: 平野区)、平野

区画整理記念会館住民大学講座「考古資料に見る暦年」（7回：東住吉区）、大阪市立市民交流センターすみよし北企画講座（7回：住吉区）、天王寺区役所「天王寺探訪ウォーク」（1回）などがあり、合計9件の講座に対し、32人の講師を派遣した。

地域のイベントへの参加・協力では、「六反長原古代市」・「大阪あきない祭り」（大阪市教委と協働）、「中央区民まつり」での遺物資料展示・ワークショップ開催などがある。また難波宮跡公園の活用を図るため、市民団体と連携した「難波宮フェスタ！2011」や「祈りの難波宮」（62名）などのイベントを共催したほか、ボランティア清掃「難波宮DEゴミ拾い」（6回133人）を行った。

(4) 学校連携など

大阪歴史博物館と協働し、難波宮跡における大阪市内小学生を対象とした「体験発掘」（7校537人）、「なにわ歴博わくわく子供教室」（体験発掘）を企画・実施した。その他、大学への非常勤講師派遣（3名）を行った。

(5) 「関西・考古学の日」の開催

全国埋蔵文化財法人連絡協議会の近畿ブロックの法人が連携し、9月～11月の3ヶ月間で、各団体が計画した展示、講演会・講座、遺跡公開などの事業を、共同で広報・宣伝する企画を考案した。共同のホームページやチラシを活用し、各参加団体を巡るスタンプラリーを開催することで市民の関心を高め、多数の参加者（規定の8箇所以上を回ると抽選に応募ができる：応募者117名）を得た。また、中核行事として10月15日（土）に「関西・考古学の日」記念シンポジウムとして科研費補助金基盤研究（A）による『大阪上町台地から都市を考える3 都市と自然の歴史学—弥生時代から難波宮—』を大阪歴史博物館で開催した（参加者120名）。

(6) 資料の活用

7月6日（水）～10月3日（月）の間、10回目となる大阪歴史博物館での特集展示「新発見！なにわの考古学2011」を開催し、速報性や話題性を重視して約300点の遺物を展示した。また、大阪市内の公的機関・学校・企業などから依頼を受けて開設した展示施設（「街角ミュージアム」など）は37箇所、展示資料は2,332点を数えたが、年度末に学校統廃合および民間企業の都合により2箇所が閉鎖された。一方、天王寺区役所では上本町遺跡の最近の調査成果から展示更新を行ったほか、大阪市立クラフトパーク・平野区民センターにて企画展の制作・協力を行った。

研究所が保管している資料の貸出は、特別展など短期貸出24 [19] 件436 [235] 点であったほか、出版などのための写真・図の提供は58 [79] 件、資料調査・見学対応は7 [17] 件であった。

(7) 情報発信

文化財情報誌『葦火』を年6回（151～156号）刊行した。定期購読者は115 [153] 人であった。ホームページでは講座や現地説明会などをはじめとするイベント、出版に関する情報を掲載した（23年度接続43,009 [46,499] 件／累計463,490件）。

5. 文化財に関する研究と支援・交流

科学研究費補助金基盤研究（A）・（B）・（C）として5件、1,222万円を獲得した（間

接経費含む)。図書は交換・購入により約662 [603] 冊を登録した。その結果、研究所図書は75,906 [75,244] 冊で、外部の閲覧にも供した。

なお、奈良文化財研究所の埋蔵文化財担当者専門研修3件、兵庫県猪名川町の発掘調査・遺物分析指導3回、古代吉備文化財センター、野尻湖発掘調査団へ職員研修ないし調査指導のため職員を8回派遣したほか、外部団体の研究分担依頼に2名の学芸員が応じた。

3 大阪歴史博物館管理運営事業

11月3日の開館10周年を中心に、プロジェクトチームが企画したさまざまな感謝イベントの実施により入館者増をはかるとともに、常設展示パワーアップ企画として、異なったジャンル（現代美術作品のインスタレーションや子ども向けイベント「かえっこ」）とのコラボレーションなどをおして、今後の博物館のあり方を探った。また大阪城天守閣との共同企画の特別展開催や、大阪市立大学と共同での古文書講座の実施など、他の博物館や大学との連携により、さまざまな事業展開の可能性を探りながら、市民サービスの向上に努めた。

1. 資料の収集、保管事業（〔 〕は昨年度）

購入資料として^{しんぎす}辛基秀コレクションの魚楽図屏風を含む4点を収蔵した。寄付資料に関しては、資料収集方針にもとづき、大阪能楽殿図面など、歴史資料1,001点、美術資料294点、民俗資料113点、芸能資料1,018点、建築資料21点、合計2,447点〔2,368点〕を整理・燻蒸し、収集・保管した。この結果、当館で保管する館蔵品は121,333点〔118,882点〕に達した。

2. 展示事業

(1) 常設展示

常設展示「都市おおさかの歩み」では、前期難波宮以前の瓦などの最新の発掘資料のほか、地震・津波関係資料や錦影絵など、各フロアにおいて季節感や話題性を考慮して館蔵品を適宜更新するなど、年間24回の展示替えを実施し、常設展示の充実に努めた。また展示解説は、土曜・日曜・祝祭日に実施し、1,626人〔1,629人〕の参加を得た。本年度は11月を中心に開館10周年記念事業を展開し、常設展示の充実に努めたが、東日本大震災の影響により、本年度の常設展入場者数は前年度比4.9%減の193,128人〔203,030人〕となった。

(2) 特集展示

特集展示室では、大阪市内の最新の発掘成果を紹介した「新発見！なにわの考古学2011」のほか、森一鳳、上方舞・山村流、古文書からみる大坂の町、摂河泉の古瓦など、館蔵品を活用した展示のほか、大阪市交通局所蔵資料による市電とバスの展示や、民間研究団体の協力を得て開催した刀装具や根付を中心とした近世細密工芸の展示など、年間7本の特集展示を開催し、大阪の歴史と文化の紹介に努めた。

(3) 特別展示

特別展は、本年度5本を開催した。内訳は自主企画展が3本、巡回展が2本であった。

自主企画展「民都大阪の建築力」（平成23年7月23日～9月25日 開催日数55日間）では、事務所や百貨店など民間の手により時代の最先端を行ったデザインの建築や、行政の手によって建てられた学校建築などの公共建築に注目し、大阪を代表する近代建築の魅力を図面やレリーフなど多彩な資料で紹介した。

自主企画展「心齋橋 きもの モダン—煌めきの大大阪時代—」（平成23年10月15日～

12月4日（開催日数44日間）では、大阪が「大大阪」と呼ばれた大正末期から昭和初期の大阪・心斎橋筋の様子とそこから発信されたファッション、ライフスタイルに注目し、服飾資料や女性を描いた絵画作品、ファッション・広報関係の刊行物を展示した。

この展覧会と先の「民都大阪の建築力」は10周年記念特別展と位置付けた

自主企画展「日欧のサムライたち」（平成24年3月24日～5月6日 23年度内の開催日は7日）は大阪城とエッゲンベルグ城の友好城郭提携3周年を記念して開催、当法人内の博物館が共催した初めての展覧会で、日欧の武器武具を比較するという切り口も斬新だった。

巡回展「幕末・明治の超絶技巧 世界を驚嘆させた金属工芸—清水三年坂美術館コレクションを中心に」（平成23年4月13日～5月29日 会期41日間）は清水三年坂美術館の協力を得て、日本の美術工芸界の一大転機となった幕末・明治期に新たな芸術をめざし制作された金属工芸の名品を紹介し、内外の来館者の注目を集めた。

巡回展「柳宗悦展—暮らしへの眼差し—」（平成23年1月7日～2月29日 会期46日間）は生活工芸品のなかに美を見出した柳宗悦の没後50年にあわせた企画で、柳の収集した民芸品を収蔵する日本民藝館から約400点が出品された。柳が注目した民芸の代表作が一堂に会した構成は高い評価を受けた。

これらの特別展の観覧者は193日間で合計89,677人であった（昨年度比18%減）。

3. 調査・研究事業

難波宮と大阪学の研究を2本柱とし、昨年度からの継続として「大阪の近代美術工芸」と「下郷コレクション」を、今年度からの新規として「前期難波宮の造営・廃絶に関わる諸問題の再検討」と「近世・近代大阪の河川・船・橋に関する調査研究」の4つの共同研究を実施した。また基礎研究としては、昨年度から継続して、大阪と江戸・東京との都市比較史研究を実施した。研究成果については「共同研究成果報告書」や「研究紀要」などで発表し、「なにわ歴博講座」などをとおして市民に還元した。外部資金による研究では、科学研究費補助金（364万円）を獲得し、基盤研究（C）2本、若手研究（B）2本を行った。

当館が難波宮研究の一環として、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所と共同で史跡難波宮跡公園東側での発掘調査を実施し、過去2年の調査で検出されていた後期難波宮建物基壇の東西端と北西角を確認し、基壇の規模が確定した。12月24日には現地公開を実施した。

4. 教育・普及事業

教育普及事業としては、市民の歴史学習を支援するため、金曜夜間の学芸員による「なにわ歴博講座」や大阪文化財研究所との共催による「金曜歴史講座」のほか、難波宮や大阪そして全国規模の歴史をテーマにした7回のシンポジウム、歴史的な街道と遺跡を訪ねる「なにわ考古学散歩」や「大坂ぐるり町あるき」などの見学会、そして「第7回大阪アジア映画祭」「2011 優秀映画鑑賞会」といった映画関係の事業を実施し、多彩なメニューを市民に提供することができた。また各特別展や特集展示においても、関連の内容でシンポジウム・講演会・講座・見学会・コンサート・ワークショップ・展示解説など多くの行事やイベント

を開催した。これらの事業は合計 1,985 回を実施し、総計 28,231 人の参加者を得た。

子どもを対象とした「わくわく子ども教室」では、「歴史講座と体験発掘」を 3 日間にわたって開催し、103 人の参加があり、常設展 8 階では毎月第 1 土曜の「和同開珎の拓本でしおりをつくろう」と「土人形マグネット作り」に、年間 333 人の参加者があった。また、季節に合わせて開催した夏の「綿くり・糸つむぎ体験」には 2 日間で 373 人、正月の「凧づくりと凧あげ」には 21 人の参加者を得た。毎月 2 回の 1 階のエントランスでの「手作りおもちゃで遊ぼう」はおもちゃ作りサポーターによる協力のもと 23 回実施し、1,761 人の参加者があった。

ボランティア事業は、市民参加型博物館をめざす事業の一環として導入しているもので、今年度は登録の切り替えが行われ、206 人が新しく登録した。活動は、難波宮の遺跡をめぐるガイドツアー、常設展示での子どもスタンプラリー、古代衣装・江戸時代の両替商体験・明治の双六遊びなど 6 種のハンズオン、8 階の「歴史を掘る」コーナーでの考古学の体験学習を実施した。ボランティアの活動は休館日を除く年間 304 日で、延べ 6,721 人が活動を行った。なお、ボランティア活動の充実と来館者対応の向上を目的に、5 月から 3 月にかけて講習や他施設の見学など、年間 10 回の館内・館外研修を実施した。

5. 学校・市民等との連携

学校連携としては、教員研修、中学生等の職場体験・職業講話・職業インタビュー、小学校高学年の発掘体験のほか、大学生の博物館実習の受入を行った。

教員等の研修では、大阪市教育センターとの共催で、「大阪市教員研修」「大阪市教師養成講座」を実施した。また大阪府教育センターによる「大阪府教員初任者研修」を受け入れた。中学生等の職場体験・職業講話・職業インタビューは、6 校 76 人 (46 人) を受け入れたほか、修学旅行等で当館を訪れる小中学生グループからの学習相談にも応じた。体験発掘は、11 月 8 日から 14 日にかけて大阪市小学校社会科研究会の協力を得て、7 校 537 人 (652 人) を対象に実施した。大学生の博物館実習は 8 月から 9 月にかけて延べ 12 日間で 12 大学 65 人 (48 人) を、また博物館見学研修については 9 大学 380 人 (7 大学 184 人) を受け入れた。

市民等との連携では、上町台地を拠点に活動する NPO 法人まち・すまいづくりとの共催により、「うえまちコンサート」や「上町台地歴史講座」を開催した。また NPO 法人 OSAKA ゆめネットとの共催で、難波宮の発見者である故山根徳太郎博士の命日にちなみ、7 月 28 日に「難波宮フェスタ 2011」として講演会・ワークショップ・石組み遺構特別公開などを実施し、2,106 人 [1,400 人] の参加者を得た。

6. 情報発信、広報宣伝

情報発信、広報宣伝については館事業を広く周知し、館利用者の増を目的として積極的に取り組んだ。まず新規の媒体として、若い女性に向けた宣伝を強化するねらいで「えんそくのおしおり」を刊行し (1~3 号)、飲食店などへ設置するなどして利用者の掘り起こしを目指した。その他、web 関係では展示・普及事業にかかわる案内をすべて掲載し、年間で 331,030 件のアクセスがあった (1 日平均 904 件、前年度比 117.6%)。また「モバイルサイト」や「なにわ歴博ブログ」の活用、年間行事予定表やなにわ歴博カレンダー (4

回各2万部)、子どもを対象とした「なにわれきはく新聞」(4回各1万2千部)などの紙媒体の発行も継続し、多様な層への情報提供に取り組んだ。

7. 来館者サービスの向上

利用促進を図りながら来館の楽しみを感じてもらおう目的で「大阪歴史博物館スタンプカード」制度を導入している。展示を観覧するとスタンプの押印が受けられ、6個たまると展示小冊子『展示の見所』などと引き換えられる特典があり、今年度は1,267人の引き換えがあり、昨年度の711人より大幅に増加した。また、館内のレストランとの連携により特別展観覧者への入館割引または飲食割引のサービスを実施している。昨年度より導入した大阪城天守閣とのセット入場券(常設のみ)については広報活動を強化した結果、両館で20,163枚[3,555枚(4か月)]を販売し、利用者は順調に推移している。

8. 施設の維持管理

建物設備の維持保全のため空調をはじめとする電気、機械設備などの機器・装置の日常点検のほか、定期メンテナンス、法定点検などを実施し良好な施設設備の維持に努めた。また経年劣化等による機器の不具合に対応し、空調関係機器の消耗性部品の交換、送風機のオーバーホールを大規模に行った。蒸気配管の劣化については大改修が課題となっているが、部品交換等応急的な補修により蒸気漏れ等の故障に対応した。老朽化に伴う保守困難や障害が頻発していた館内ネットワーク機器は、最低限の更新整備を行いシステム運用の安定化を図った。

入場券の発券業務については機械化により、業務のスピード化を図り、お客様より好評を得ている。また、館内外の日常的な清掃に努め、カーペットクリーニングなどの定期清掃を実施し、建物の美観を保つように図った。

防火・防災に関しては当館、NHK大阪放送局、ビル管理会社が一体となった訓練を行い、非常時の対応について三者で確認を行った。

9. 友の会 その他独自事業

自主運営団体である友の会については、5月に総会が開催されるとともに「町人文化を歩く」「史跡をめぐる」「資料館を歩く」「街道を歩く」をテーマとした見学会など、計8回の事業が行われ、334人の参加者があった。なお当館は、事業の企画や講師の派遣などをおして友の会の活動支援を行った。

その他、独自の事業として、5月に各館・研究所が連携したブックフェアをジュンク堂書店大阪本店で開催、並行して5月から7月にかけて、旭屋書店本店にて当館の図録フェアを開催し、展示図録等の販売・普及に努めた。またジュンク堂書店大阪本店では、展示図録等の常備販売を継続中である。

4 大阪市立自然史博物館管理運営事業

平成 23 年度は 3 回の特別展を開催したが、特筆すべきは主催展として開催した「来て！見て！感激！大化石展」の成功である。この展覧会では 917 点の化石資料を展示したが、他館からの借用は 21 点で、ほとんどを館蔵標本で展示を構成したものであり、これはこれまでの資料収集活動の成果といえる。また広報活動にも新たな試みとして「地下鉄車内ガイド放送（最寄り駅案内）」を取り入れるなどの工夫を凝らした結果、多数の入場者を迎えることが出来た。

1. 資料の収集、保管事業

動物・植物・昆虫・化石・岩石・鉱物等の資料を、大阪を中心に日本全国、さらに必要に応じ海外からも収集してきた。収集した標本は低温燻蒸などを実施した後、温度湿度管理が可能な収蔵庫において、資料ごとに最適な環境で保管し、展示・研究活動に活用している。また 23 年度に寄贈を受けた主なコレクションは以下の通りである。

西垣外氏鳥類コレクション（108 点）、西表島の鳥（84 点）、四国地方産チョウ類等（9043 点）、ナカスジオオハリアリパラタイプ（3 点）、東南アジア産コガネムシホロタイプ（1 点）、中国産及び奄美大島産ハネカクシタイプシリーズ（17 点）、マツタロウタカネフタオシジミ新亜種タイプシリーズ（2 点）、日本産オサムシ（2500 点）、日本産植物標本（児玉コレクション）（651 点）、大阪市及び兵庫県三田市の公園、都市部に生育する植物（544 点）、九州産シダ植物（217 点）、西川一郎採集近畿地方産植物（2,462 点）、岡山県成羽層群産植物化石（200 点）。

平成 23 年度末の総資料数は 148 万 8948 点である。（昨年度末比 29,330 点の増加）

災害時の緊急対応として、東日本大震災によって大きな被害を受けた被災地の博物館及び類似施設の標本レスキュー事業に取り組んだ。被災した標本の修復作業を分担して引き受けるだけでなく、(NPO) 西日本自然史系博物館ネットワークや昆虫担当学芸員協議会（日本昆虫学会）の事務局館として、現地の岩手県立博物館と各地の自然史系博物館をつなぐネットワークの中核として機能し、また現地におけるレスキュー事業にも参加し被災地支援の活動を行ってきた。以下列挙するとおりである。

- ・岩手県陸前高田市立博物館および同市海と貝のミュージアム所蔵標本の修復（植物押し葉標本、昆虫、貝類:当館で修復作業）
- ・岩手県陸前高田市立博物館の地質標本（現地でのレスキュー事業）
- ・宮城県気仙沼市唐桑町漁村センターの海棲生物標本（現地でのレスキュー事業）
- ・被災地岩手県の博物館と協力して子供ワークショップ事業の実施（なにわホネホネ団・NPO 大阪自然史センターとの共同事業）

2. 展示事業

平成 23 年度の常設展、特別展を合わせた総入館者数は、359,040 人（常設展 207,751 人、特別展 151,289 人）、うち有料 131,299 人であった。常設展入館者は前年度比 39,882 名増。

(1) 常設展示

本館の常設展示は、1986年に改修された一部を除き、多くが1974年の開館当初のもので、内容の陳腐化・展示物の劣化が目立っている。系統的展示更新が必要であることは論を待たないものの、大阪市の厳しい財政事情の中で短期的な展望は得にくく、中長期的な視野に立った実施に向け検討している。

そうした中、満足度向上もめざして「ジオラボ」・「子どもワークショップ」・「自然史博物館探検クイズ」等の館内行事を実施し、来館者サービスに努めている。

平成23年度には、下記の常設展示の更改・補修等を行った。

・展示室内照明の一部LED化

国庫補助事業「グリーンニューディール基金」により、展示室内のスポット照明の大部分をLED化した。従来のハロゲン球による照明と比較して、省エネ化が図れるだけでなく、展示物がより鮮明に見えること、発熱量・紫外線量が少なく展示物への影響が軽減されることなど、多くのメリットがある。次期の展示更新時には、全面的なLED化を実施すべきであろう。なお1月17日～2月29日まで臨時休館をして、ナウマンホールの内壁補修工事と併せて実施した。

(2) 特別展

① 「来て！見て！感激！大化石展」 (平成23年7月2日～8月28日 50日間)

巨大なゾウや恐竜の化石から、琥珀に閉じこめられた小さな昆虫の化石まで、化石の魅力を紹介し、地球環境の変化とともに生物が移り変わってきた様子を解説した。展示の構成は、第1部「化石とは何か」では、様々な状態で地層の中に残されている化石を紹介し、化石の本質を解説した。第2部「生命と地球の歴史」では、46億年という地球の歴史の中で生物の種類が移り変わってきた様子を917点の標本をもとに、時代の流れに沿って展示した。

② 「Ocean!海はモンスターでいっぱい」(読売新聞大阪本社と実行委員会を組織し開催)

(平成23年9月10日～11月27日 68日間)

本展では、「海にくらす」「6億年 海のニュース」の2テーマで展示を構成し、海とそこに棲む生き物たちの多様な姿を、化石と現生標本をつかって紹介した。

③ 「新説・恐竜の成長」 (読売新聞大阪本社と実行委員会を組織し開催)

(平成24年3月10日～6月3日 75日間、うち平成23年度は19日間)

「新説・恐竜の成長」(原題: The Growth and Behavior of Dinosaurs) は、アメリカ・モンタナ州立大学附属ロッキー博物館の所蔵標本と最新の研究成果を軸に構成した展示である。成長過程を考察することができるトリケラトプスコレクション標本群、そして門外不出と言われていた「世界最大のティラノサウルス・レックスの実物頭骨化石」などで解説している。

(3) 特別陳列等

① 特別陳列「お披露目！博物館に届いた新しい標本」 (平成23年4月29日～5月29日)

会場：自然史博物館 本館2階 イベントスペース

最近1年間に、博物館資料に加わった動物・植物・昆虫や、化石・岩石の標本の中から、「大阪湾に漂着したマッコウクジラの胃内容物と下顎骨」や「南アルプス鳳凰山の

甲虫類」など、約2万点を展示した。

②パネル展「今 地震・津波を考える」 (平成23年7月23日～8月28日)

会場：自然史博物館 本館2階 イベントスペース

2008年に開催した特別展「地震展2008」で使用した写真などを展示し、地震・津波に関する理解を深めてもらう機会とした。また当館で取り組んだ、陸前高田市立博物館の被災標本レスキューの紹介と、修復された標本も展示した。

③コーナー展示「大阪のタンポポは今 2010年の市民調査から」

(平成24年3月17日～6月3日)

会場：自然史博物館 本館2階 イベントスペース

2010年には福井・三重県から佐賀県までの西日本一帯でタンポポの共同調査が行われた。この調査結果から新たにわかったことを中心に展示した。

3. 調査研究事業

調査研究は博物館活動の根幹をなすものであり、学芸員の個別テーマによる研究をはじめ、市民と協同で進める「大阪を中心とした都市の自然プロジェクト調査」、来年度の特別展準備を兼ねた「大阪湾の総合調査」などを実施してきた。その成果は館で刊行する研究報告や学会誌で公表するとともに、講演会を通じて市民に普及した。

23年度は外部研究資金として文部科学省科学研究費補助金は基盤研究5件（基盤研究B1件、C4件）若手研究3件の補助を受けた。

4. 教育・普及事業

市民が自然をより深く理解するためには、展示を見るだけでなく、野外で実物の自然に触れることも重要である。自然史博物館ではこのような観点から、多様な博物館利用者とその要望に応えるため、各種の普及行事を行っている。これら普及教育事業の参加者総数は43,302人であった（詳細は別紙資料編に掲載）。

また、行事の実施に際しては、自然史博物館のボランティアである補助スタッフの協力を得ている。

5. 学校・市民等との連携

「総合的な学習の時間」に応用できるテーマで、学校教員や教員を目指す大学生・自然観察会指導者を対象とした「教員・観察会指導者向け支援プログラム」を計画的に実施できた。学校向けには、展示解説や標本など博物館資料の貸出し、学校教育を支援してきた。

友の会会員を中心に200人以上の市民が参加するプロジェクトU「都市の自然・生物相」調査の取り組みを始めている。「NPO大阪自然史センター」との連携により、博物館事業の充実にも努めている。

6. 情報発信、広報宣伝

インターネット導入後に開設したホームページは、ジャストタイムで内容豊富な情報

発信に努めている（平成 23 年度の HP アクセス数（トップページ）は約 50 万件）。一昨年からは開始した「Twitter」では、特別展キャラクターの「まきまき太郎」でアカウントを作成するなどして、特別展の混雑状況などタイムリーな情報を提供している。また特別展の内覧会には、特別展を宣伝協力いただくブロガー 10 名を招待し、市民参加型の広報を実施した。

平成 23 年度より、特別展開催時に地下鉄車内ガイド放送（最寄り駅案内）を実施し、より広く博物館の存在を沿線住民へ周知することができた。

7. 来館者サービスの向上

「花と緑と自然の情報センター」には、図書閲覧・情報検索・標本閲覧・ビデオ閲覧のコーナーがあり、学芸員を配置して質問等にも対応し、多くの市民の学習の場になっている。また、本館ミュージアムサービスセンターには教育スタッフを配置して学校対応や市民サークルへの窓口になった。常設展では、来館者向けイベントの「ジオラボ」「子ども向けワークショップ」「自然史博物館探検クイズ」、「ナガスケ」ジャンボ紙芝居を実施し、多くの来館者から好評を得ている。

8. 施設の維持管理

警備・案内・券売・清掃及び設備等の保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めてきた。職員による日常的な安全点検を励行するとともに、職場安全衛生委員会の職場巡視も行っている。防災対策では、隣接の長居パークセンターと協働で震災・防火訓練を実施し、協業体制の充実を図った。

9. 友の会

自然史博物館友の会（23 会計年度は 1,701 名）は、昭和 30 年に大阪市立自然科学博物館後援会として発足した当初から、博物館と連携しながら市民と博物館をつなぐ役目を果たしてきた。その自然史博物館友の会を母体として平成 13 年には「NPO 大阪自然史センター」が発足し、現在は大阪自然史センターが友の会を運営している。

友の会会員は、友の会が主催する行事に参加するだけでなく、博物館が開催する各種の普及教育事業にも積極的に参加し、行事を盛り上げてくれている。また友の会行事は積極的に公開し、一般の人々の参加も可能にしているので、参加者の満足度も高く、友の会への関心を高めることができた。

11 月 19-20 日には「大阪自然史フェスティバル 2011」を大阪自然史センターと共催し、2 日間で 12,200 人が参加し市民の自然に対する興味を深め、関心を高めた。大阪自然史センターは事務局を担うとともに、会場費を除く開催費用を負担した。

5 大阪市立美術館管理運営事業

没後 150 年と銘打ち、幕末に活躍した浮世絵師歌川国芳の作品 400 余点を一堂に会した特別展「歌川国芳展」では、日本経済新聞社と毎日新聞社という 2 つの新聞社が等分の出資と役割をはたして公立美術館と共催するという画期的な枠組みの実行委員会を立ちあげることができた。2 社のマスコミによる広報の充実もあり、総観覧者が 12 万人を超える展覧会となり高い評価を受けることができた。また、生誕 120 周年「岸田劉生展」は、日本の近代洋画の展覧会としては 6 万 5 千人を超える来館者を得ることができ、また初期から没年までの作風の変化を十分に堪能できる展覧会としても大きな評価を得ることができた。一方、夏と冬に開催した 2 回の特別陳列は、常設展の拡大版として、ポスターやチラシ、三つ折りリーフレットを発行するなど、田原コレクション受贈の顕彰と、大阪市立美術館の収蔵品の質の高さをアピールすることができた。

1. 資料の収集・保管事業

- ・富本憲吉作品 100 件（陶磁器 80 件・資料類 20 件）と、和気史郎作品 47 件（油彩 46 件・デッサン 1 件）、鍋島藩窯作品 118 件、イスラム陶器 2 件、有田焼の磁器 4 件、石造彫刻 2 件、根付類 8 件について、大阪市における寄付手続きが完了し、受領書と市長感謝状などを個人の寄贈者それぞれに手渡し、御礼申し上げた。
- ・原碑後漢代の拓本 1 件、漢代の漆器 2 件、漢代と朝鮮時代の陶磁器 2 件、中国・韓国・日本の陶磁器 63 件、森田恒友作油彩画 1 件、杉山寧作日本画 1 件、石井武夫作油彩画 2 件、冬木偉佐男作漆工芸作品 2 件について、それぞれ個人から寄贈の申し出を受け、評価委員会を開催した。
- ・寄託作品の受入れ（29 件）および返戻業務（178 件）を実施した。
※178 件の返戻作品の内、鍋島藩窯作品 118 件は当初寄託品であったため、寄付收受終了後、返戻作業を行った。

2. 展示事業

(1) 常設展示

美術館所蔵のコレクションの中から、日本、中国等の東アジアの品を中心とした展示を 10 回、128 日開催し、延べ 5,293 人の入場者を得た。

- ・特集展示（常設展示中で特に大きくテーマを持たせた展観）

「中国書画Ⅰ－館蔵・寄託の優品」、「雲の上を行く－仏教美術Ⅰ」として平成 23 年 9 月 17 日（土）から 10 月 16 日（日）の 26 日間開催し、「中国書画Ⅱ－阿部コレクション」、「雲の上を行く－仏教美術Ⅱ」を平成 23 年 10 月 20（木）日から平成 23 年 11 月 23 日（水）の 30 日間開催した。

(2) 特別展示

- ①没後 150 年 歌川国芳展（平成 23 年 4 月 12 日（火）から平成 23 年 6 月 5 日（日）までの 49 日間、観覧者数 125,651 人）

幕末に活躍した浮世絵師歌川国芳の作品 400 余点を一堂に会した「没後 150 年 歌

川国芳展」を大阪市立美術館、日本経済新聞社、毎日新聞社の主催により開催した。

②第 57 回全関西美術展（平成 23 年 7 月 5 日（火）から 7 月 18 日（月・祝）の 13 日間、観覧者数 7,136 人）

全関西美術展は、昭和 16 年に大阪市民の芸術振興を目的として、公募による総合芸術展「大阪市展」とし発足し、現在は、読売新聞社と共催し「全関西美術展」として開催している。今年度は 1,234 点の応募があり、592 点が入選し、無鑑査・招待作家の作品を含めて 936 点の作品を展示した。

③特別陳列「受贈記念 田原コレクション 色鍋島・藍鍋島」、「中国石造彫刻 400 年 雕時光 Sculpting in time」、「漆を楽しむ 蒔絵・螺鈿・根来」（平成 23 年 8 月 2 日（火）から平成 23 年 9 月 4 日（日）まで 30 日間、観覧者数 7,494 人）

故田原一繁氏と元子夫人の収集により 118 点にのぼる鍋島焼をご寄贈賜り、その受贈を記念して初期鍋島焼から後期鍋島焼の名品の数々を展示するとともに、日本を代表する中国彫刻コレクションとして知られる山口コレクションを中心とした石刻造像や館蔵・寄託品の中から技法、蒔絵であらわされた、近世から近代にいたる日本の漆を展示した。

④生誕 120 周年 岸田劉生展（平成 23 年 9 月 17 日（土）から 11 月 23 日（水祝）までの 58 日間、観覧者数 65,625 人）

近代美術史を代表する岸田劉生の代表作や数多くの「麗子像」をはじめ、風景画、静物画さらにはデッサンまで 240 点を一堂に会した「生誕 120 周年 岸田劉生展」を大阪市立美術館、読売新聞社の主催により開催した。

⑤特別陳列「光琳資料をひもとく」、「中国拓本一師古齋コレクション」、「中国工芸—金属器・陶磁器の多彩な表現」（平成 24 年 1 月 7 日（土）から 2 月 5 日（日）までの 26 日間、観覧者数 5,164 人）

尾形光琳に関わる写生帖、画稿、蒔絵図案などの資料、大阪出身の実業家岡村蓉二郎が収集した中国拓本のコレクション、新石器時代の彩陶から明清代の官窯磁器におよぶ、中国工芸の多彩な作品の数々を展示。

④第 43 回日展（平成 24 年 2 月 18 日（土）から 3 月 18 日（日）までの 26 日間、観覧者数 70,202 人）

大阪展には全国巡回する基本作品 274 点に加えて、大阪・奈良・和歌山・兵庫の地元入選作品 344 点、合計 618 点を陳列した。内訳は日本画 99 点、洋画 105 点、彫刻 54 点、工芸美術 75 点、書 285 点で、日展出品作家による作品解説を 2 月 21 日から 3 月 15 日まで 15 回開催した。

3. 調査・研究事業

寄贈、寄託の申し出のあった作品に関してその諾否のために調査・研究を行った。

特別展「生誕 120 周年記念岸田劉生展」の出品交渉や、美術館・博物館、社寺、個人所蔵の関連作品の調査・研究を行った。

平成 24 年度に開催を予定している特別展「草原の王朝 契丹」展、特別展「紅型」展、「北斎」展の開催に向けて、作品の調査・研究を行った。また、平成 25 年度に開催を予

定している特別展「ボストン美術館 日本美術の至宝」展に向けて、開催した巡回先の博物館および開催予定の美術館におもむき、作品の調査研究とともに展示方法などの調査を行った。

4. 教育・普及事業

(1) インターン研修事業

中近世絵画・中国絵画・工芸美術の3分野計5人の研修を行い、収蔵品の作品調査とともに、常設展における企画立案展示に関する業務を学芸員とともに実施した。

(2) 博物館実習

23校から49名の大学生を受け入れ、全関西美術展の受付・審査・陳列補助の実習と工芸や書画の作品の取り扱いなどの講義を実施した。

(3) 記念講演会など（合計23回、総参加者数2,485人）

- ・特別展「没後150年 歌川国芳展」

計3回実施、外部講師2回、当館学芸員1回

- ・第56回全関西美術展

審査員（5部門5人）による審査講評を授賞式とともに実施した。

- ・特別展「生誕120周年記念 岸田劉生展」

計4回実施、外部講師2回 当館館長2回

- ・第42回日展 出品地元作家18人による作品解説を15回実施した。

(4) 普及イベント（合計12回、総参加者数1,344人）

- ・文化連携事業として

米朝事務所による「茶臼山落語会」（出演者4名）を5月18日（水）に実施した。

Narrative なピアノコンサート VOL2 を1月29日（日）に実施した。

- ・大阪市立美術館75周年記念事業として

「蓄音器 ライブ&トーク」を8月6日（土）、8月13日（土）、8月20日（土）、8月27日（土）の4回実施し、ヴァイオリン演奏会を8月20日（土）に実施した。

- ・第43回日展

日展作家プレゼント抽選会 地元作家提供によるプレゼント抽選会を5回実施した。

5. 学校・市民等との連携

(1) 小学校鑑賞授業

大阪市内小学校と連携し、美術館で開催した岸田劉生展の鑑賞授業を行い、合計4校、290名の生徒・教員の参加を得た。

(2) 障害者特別鑑賞会

三菱商事株式会社と連携し、普段、美術館等へ行くことが困難な障害者の方々がゆっくりと鑑賞できる特別鑑賞会を10月1日（土）に行い、97名の参加を得た。

6. 情報発信、広報宣伝

美術館ホームページにより展覧会スケジュール、内容等の各種案内を行っている。

展覧会のポスターやチラシの掲示を大阪市の広報板、協力をいただいているあべの地下街等の民間施設及び各美術館・博物館に依頼しているほか、市営地下鉄の中吊り広告の掲出も行っている。また、新聞社、放送局と連携し、新聞への記事掲載やテレビ放映に努めた。

7. 来館者サービスの向上

天王寺ゲート及び本館改札と総務課との連絡を密にし、ゲートでの図録販売、来館者に親切な案内板の的確な設置などお客様のニーズをくみ上げ、必要であれば即実践することにより財団ならではのサービスを実施している。

8. 施設の維持管理

警備・清掃・設備管理及び保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めている。職員による日常的な安全点検も励行した。

経年による設備関係の老朽化が進み、大阪市とも連携しつつ維持管理にあたっている。

9. 友の会

友の会ニュースを6回発行し、野外写生会を7回、基礎講座を3回、講演会を1回開催した。また、友の会の展覧会として、7月19日から24日に夏季展、新春友の会展を1月5日から9日に開催した。

今年度の会員は642人で、昨年度から104人の減となった。

10. 美術研究所

美術研究所は、昭和21年に開設された絵画の教育機関であり、関西を基盤として活躍している質の高い画家が講師として日々の指導を行っている。

美術研究所の絵画コンクールを6回開催し、研究所展覧会を1回、絵画作品批評会を2回開催し、「美術館へ行こう」として小中学生を対象とした絵画教室を2回、親子を対象とした写生会を1回、大人を対象とした絵画教室を1回開催し、合計89名の参加を得た。

入所検定は4月、9月、1月に行い、それぞれ19人、15人、15人の入所者があった。その結果、平成23年度研究生は137人となり前年度より3人減となった。

6 大阪市立東洋陶磁美術館管理運営事業

4月から7月にかけて開催した特別展「浅川兄弟展」は、ご遺族からの寄贈品を活用するため、過去の展覧会をスケールアップし、当館ならではの独自性と専門性のある内容の展覧会を企画し、更に全国巡回展とした。同展の開催は優れた韓国陶磁と、浅川兄弟関連作品・資料を多く所蔵する当館の使命でもあり、忘れられたままだった浅川兄弟の存在を一般の人に広く紹介でき、また学術的にも大きな貢献をすることができた。同展は、古陶磁器に関心の高い中高年のリピーター層を確実に取り込むことができ、当館コレクションの価値や存在意義をも広く宣伝した。

1. 資料の収集、保管事業

芸術的あるいは資料的価値の高い作品の寄贈受入について推進し、館蔵品の寄附の申出が計3件（作品数12件49点、評価額4,950万円）あった。

さらに、展示事業や研究用として、東洋陶磁その他美術に関する研究資料、文献、写真等として書籍1,036冊を収集した。

また、常駐警備及び厳重な保管設備により作品の安全性を確保するとともに、免震展示ケースの設置を推進し（展示室Bの2ケース、展示室Cの1ケース、展示室Kの5ケース）、これにより全館展示ケースの免震化が完了した。

さらに、全館の展示室ケース内展示照明については、国の「ESCO事業」によりLED化を実施し、フラットパネルタイプの自然光に近い高演色LED（調光、調色可能）などの導入により、陶磁器作品本来の色合いや質感を鑑賞できる展示環境を整備した。

2. 展示事業

(1) 常設展示(平常展示)

安宅コレクションの中国陶磁・韓国陶磁、李秉昌^{イビョンチャン}コレクションの韓国陶磁、日本陶磁の中から代表的作品を中心に約300点をそれぞれ陶磁史の流れに沿って展示した。あわせて、沖正一郎コレクションの鼻煙壺約100点を展示し、陶磁器以外にも中国の美術工芸品を紹介した。

また、常設展示に変化と多様性を持たせるため寄贈作品を中心に約20～30点をテーマ・ジャンルごとに企画構成する特集展示を次のとおり開催した。

「李秉昌コレクション韓国陶磁」（4月9日～7月24日）

「古染付^{こそめつけ}に遊ぶ一日本人が愛した中国明末の青花磁器」（8月2日～8月28日）「掌^{しょうちゅう}中の美一沖正一郎コレクション鼻煙壺^{びえんこ}」（9月10日～12月25日）

(2) 企画展示

国際交流企画展「碧緑^{へきりよく}の華^{はな}・明代^{みんだい}龍泉窯^{りゅうせん}青磁^{せいじ}—大窯^{だいよう}楓洞岩窯^{ふうどうがん}址^し発掘^{はつこく}成果展^{けいこ}」

（9月10日～12月25日、開催日数94日、入館者数16,633人）

中国浙江省の龍泉窯は青磁の一大産地である。近年、大窯楓洞岩窯址が発見され、

故宮博物院などの伝世品に類する破片が出土し、ここが明時代の洪武（1368-98）・永楽（1403-24）年間に宮廷向けの美しい碧緑色の青磁が焼かれた窯であったことが明らかになった。本展ではこの龍泉大窯楓洞岩窯址の発掘成果を出土品約 80 点により日本で初めて紹介した。展示冒頭の龍泉を紹介する展覧会用のハイビジョンビデオ番組も好評で、「今回の龍泉、はじめてでこの多彩さと色彩の質や形に感動しました」など来館者アンケートの結果は約 87%が満足との回答であった。なお、本展に併せて平常展では館蔵龍泉窯青磁のコーナーを特別に設け、当館の国宝や重要文化財などの龍泉窯青磁を展示した。さらに、講演会や見どころ解説、レクチャーなど様々な層への普及活動にも努めた。

(3) 特別展示

特別展「浅川巧生誕 120 年記念 浅川^{のりたか}伯教・巧^{たくみ}兄弟の心と眼—朝鮮時代の美展

（4月9日～7月24日、開催日数 93 日、入館者数 23,562 人）

浅川伯教（1884～1964）・巧（1891～1931）兄弟は、日韓交流の架け橋としてよく知られている。本展は「朝鮮陶磁の神様」とも言われた兄の伯教と、朝鮮の工芸研究で知られる弟・巧をテーマとして、近年、再評価の気運が高まっている浅川兄弟の事跡を、ご遺族からの新寄贈品や、朝鮮時代の陶磁器や工芸品を中心にはじめて体系的に紹介した。主要新聞・美術雑誌やテレビ番組で紹介され、広報ポスターのキャッチフレーズなども評判を呼んだ。講演会や見どころ解説等関連行事も充実させ、中高年のリピーター層を確実に取り込むとともに、民藝に関心のある層まで幅広い入館者層の支持を得ることができた。

3. 調査研究事業

展示事業に関する調査研究として、韓国陶磁の鑑賞に関する資料調査、浅川兄弟関連の作品や資料調査、杭州老虎洞窯址に関する出土資料や窯址の調査並びにルーシー・リーに関する資料調査をそれぞれ実施した。また、韓国陶磁調査研究事業として「中後期高麗青磁の研究」をテーマとして韓国や中国の出土資料や窯址等の調査と公開講座を実施した。

なお、外部資金による研究では、科学研究費補助金計 5 件（計 370 万円）を獲得し、同基盤研究（B）海外 1 件、同基盤研究（C）1 件、同若手研究（S）1 件、同若手研究（B）2 件を実施した。

4. 教育普及事業

(1) 講演会等の実施

展覧会の内容の理解や、調査研究の成果を還元するため講演会、講座、研究会等を開催した。

① 講演会

「浅川兄弟と植民地朝鮮」高崎宗司氏（津田塾大学国際関係学科教授）他計 7 回、参

加者 計 472 人

② 講座

李秉昌博士記念公開講座「高麗“象嵌青磁”の魅力をさぐる」柳光烈氏（海剛陶磁美術館）・姜京男氏（韓国国立中央博物館）1回、参加者計 54 人

府・市ブロック生涯学習広域講座「おおさかの魅力再発見～ひと・まち・文化～」小林仁（当館主任学芸員）2回、参加者計 90 人

③ 学芸員アフタヌーン・レクチャー

第 21 回「浅川伯教・巧兄弟の心と眼展開催の舞台裏」小林仁（当館主任学芸員）、鄭銀珍（当館学芸員）他計 3 回、参加者計 80 人

④ 学芸員による見どころ解説

「浅川兄弟を知っていますか？」鄭銀珍（当館学芸員）他計 19 回、参加者計 222 人

(2) ボランティアによるガイド事業

常設展・企画展の展示期間中、土・日・祝日の午前と午後にボランティアによるギャラリガイドを行った。（37 回、1283 人）

団体見学者については、平日も予約によるガイドを実施した。（29 回、243 人）ボランティアガイド事業の充実を図るため、展覧会ごとに学芸員が研修を行った。

5. 各種団体との連携

効果的な広報活動と入館者へのサービスの充実のため、中央公会堂、中之島図書館、中之島 4117、国際美術館等とくに中之島地域の各種団体、学校、地域活性化計画、周辺各施設との広報連携（ポスター、チラシ、パンフレットの交換設置、掲載協力、相互情報提供等）を図った。

6. 他の博物館等との連携

国内外の美術館、博物館、研究機関等との多角的な連携による共同研究、展覧会の共催、シンポジウム・研究会の開催等の事業推進を行った。

① 国際交流企画展「碧緑の華・明代龍泉窯青磁—大窯楓洞岩窯址発掘成果展」における中国・浙江省文物考古研究所、浙江省博物館、龍泉青瓷博物館との協力提携

② 平成 24 年度特別展「マイセン磁器の 300 年」のためのサントリー美術館、松本市美術館、兵庫陶芸美術館との展示協力

③ ベルリン国立アジア美術館への長期貸出の継続

④ 中国甘肅省博物館での「江戸名瓷—伊万里展」（平成 24 年 3 月 12 日～5 月 6 日）の開催（当館館蔵品 160 件による中国巡回展、当館共催）

7. 情報発信・広報宣伝

ホームページ、館案内パンフレット、年間展示予定、ポスター・チラシ、マス・メディアの活用などにより、東洋陶磁美術館の活動を広く周知した。また、入館者に対するアンケート調査（通常アンケートと展覧会評価アンケートの 2 種）を展覧会ごとに実施し、入館者のニーズを把握して事業に反映するとともに、効果的な情報提供、広報活動等に

活かした。

8. 来館者サービスの向上

案内サインの改善、展示品のわかりやすい説明など観覧者に配慮した環境作りを行ない、受付窓口寄せられる利用者の要望やアンケート調査の結果など、市民の生の声を的確に美術館運営や展覧会に反映させ、来館者のサービスの向上に努めた。

9. 施設の維持管理

入館者が安全かつ快適に施設を利用できるよう全ての施設、設備の適切な維持管理を行った。警備・受付案内・清掃及び設備等の保守点検を外部委託し、安全・快適な施設の維持管理に努めてきた。職員による日常的な安全点検も励行し、職場安全衛生委員会の職場巡視も行っている。防災対策では、館職員だけでなく、業務委託業者や喫茶、売店の従事者も一体となって防火訓練を実施し、有機的かつ効果的な防災体制の充実を図った。

10. 出版等事業

展覧会図録（特別展「浅川巧生誕 120 年記念 浅川伯教・巧兄弟の心と眼—朝鮮時代の美展」、国際交流企画展「碧緑の華・明代龍泉窯青磁—大窯楓洞岩窯址発掘成果展」、特集展「掌中の美 沖正一郎コレクション鼻煙壺」など）の製作販売並びにミュージアムグッズの製作販売を行った。

11. 友の会事業

講演会、研究会、研修や「友の会通信」の発行などを通して会員へ東洋陶磁に関する情報提供等を行う一方、美術館の利用促進や普及活動などに会員の協力を求めるなど相互連携を図った。

7 大阪城天守閣管理運営事業

天守閣復興 80 周年の記念事業を大阪市の「大阪城天守閣復興 80 周年記念プロジェクト」と連携をとりながら年間をとおして実施した。その結果、国内外から約 141 万人（前年度比 2.9%増）の来館者を受け入れることができた。

1. 資料の収集、保管事業

桃山時代の狩野派の制作になる「竹虎図屏風」をはじめ、「豊臣氏四奉行連署状（石川玄蕃宛）」、「羽柴秀吉書状（宛名欠）」、「織田信孝書状（津田兵衛佐ほか宛）」の計 4 点、資料的価値が高く展示にも有効に活用しうる資料を購入により取得した。また、「羽柴秀吉書状（宗久宛）」を修理し、展示に利用できる状態にした。

2. 展示事業

(1) 常設展示

2ヶ月を目途に文化財展示を全面的に更新し、そのつど 3階・4階のフロアごとに、新しいテーマの展示を立案した。映画「プリンセス・トヨトミ」の上映にあわせて「プリンセス・トヨトミ」、NHK 大河ドラマ「江一姫たちの戦国」放映と連動して「女たちの戦国」など、年間 9 本のテーマで展示した。

(2) テーマ展

①「南木コレクションシリーズ第 11 回 瓦版にみる幕末大坂の事件史・災害史」（平成 23 年 3 月 19 日～5 月 8 日）

幕末、大坂の人々は、外国船の来航、災害、社会の混乱といった厳しい現実に向き合い、徳川幕府の滅亡という大事件に遭遇した。大阪城天守閣が所蔵する多数の瓦版には、そうした出来事が独特の方法で表現されている。本展ではそれら瓦版 75 点により、庶民の目からみた幕末大坂の世相を浮かび上がらせた。254,445 人の観覧者を迎え好評を得た。

②「世情—大阪城天守閣収蔵風俗図屏風にみる」（平成 24 年 3 月 24 日～5 月 6 日）

豊臣秀吉の天下統一をまたぐ前後の時期、美術界では人間のもろもろの営みを活写する風俗画がさかんに制作された。労働や遊楽、流行、行事、戦乱など、人の世の諸相をありありと表現するそれらの作品は、同じ時代に生きる名もなき人々を主題にすえる点で画期的だった。本展は、大阪城天守閣が収蔵するそうした風俗図屏風 14 点のなかに当時の世情をさぐった。会期中 275,987 人の来館者を迎え好評を得た。

(3) 特別展

①「大阪城天守閣復興 80 周年記念特別展 天守閣復興」

（平成 23 年 10 月 8 日～11 月 23 日）

大阪城天守閣は昭和 6 年（1931）、大阪市民の寄付によって復興され、平成 23 年（2011）11 月 7 日に 80 年を迎えた。それを記念し開催した本展では、復興に至るまでの経過、さらに復興から現在に至る大阪城の歴史を取り上げ、決して平坦ではなかった大阪城の「現代史」を関連資料により振り返った。会期中 255,877 人の来館者を迎え、好評を得

た。

- ②「大阪城・エッゲンベルグ城友好城郭提携 3 周年記念 大阪城天守閣・大阪歴史博物館合同自主企画特別展 日欧のサムライたち—オーストリアと日本の武器武具展—」
(平成 24 年 3 月 24 日～5 月 6 日)

大阪城天守閣が平成 21 年 10 月、オーストリア・シュタイヤーマルク州のエッゲンベルグ城と結んだ友好城郭提携 3 周年を記念して、大阪歴史博物館において開催したもので、シュタイヤーマルク州立博物館ヨアネウムの武器庫が所蔵する武器武具などオーストリアの資料 46 点と大阪城天守閣収蔵の武具類など 38 点をあわせて展示。好評を得た。

3. 調査・研究事業

「豊臣時代資料・史跡調査」として、大坂の陣で豊臣方として活躍した後藤又兵衛の関連資料および関連史跡等の調査を福岡県行橋市その他で実施した。また「徳川時代大坂城関係資料調査」として、滋賀県甲賀市にて同市所蔵「水口藩加藤家文書」に含まれる大坂加番関係資料の調査を実施した。

『大阪城天守閣紀要』39 号、『徳川時代大坂城関係史料集』15 号を刊行して、調査研究の成果を公表した。

4. 普及事業

(1) 教育普及

大阪城内や大阪市内外で開催された講演会・シンポジウム・史跡見学会等に積極的に講師を派遣し(74 件)、歴史や資料に関する知識の普及をはかった。また、館内に兜・陣羽織(レプリカ)の試着体験コーナーを設け、希望者(年間を通じて約 3 万 7 千人)に体験の機会を提供した。

(2) 資料の活用・普及

収蔵品や関連資料の写真を作成管理し、公共機関や研究者、出版・放送関係機関等からの掲載や複製作成、商品化の要望に応じ積極的に提供することで、資料の普及に努めた。写真資料の提供数は 667 件 2,186 点におよんだ。

他の博物館施設等からの文化財貸出依頼に対しては 33 件 205 点に応じ、展覧会の企画や展示指導等に関する「特別協力」依頼に対しては 1 件に応じた。

収蔵品図録や展覧会図録、名品絵はがき、館蔵品目録、大阪城の案内書等を作成し、頒布した。

5. 学校・市民等との連携

地域・市民団体や企業、大阪城公園内および周辺イベント(大阪ウオーク 2011、KANSAI ウオーク 2011、大阪城サマーフェスティバル 2011 他)などと連携し、相互に広報しあったり、共通入場割引を実施したりすることで、集客効果を高めた。

また、春・秋のイベントでは、大阪府内・市内の高校生と連携し、和太鼓や吹奏楽の演奏をとおして、より多くの集客に努めた。

さらに、市内の小・中学校と連携して「大阪城写生画展」を開催した。

○「第40回大阪城写生画展」(平成24年1月2日～1月31日)

大阪の将来を担う小学生・中学生が大阪城を大阪の誇りに思い、憩いの場としてより一層親しむと同時に、大阪の歴史・文化についての理解を深めることができるよう、大阪市内の小・中学校と連携し、大阪城の写生画を募集して入選作品を展示した。

6. 情報発信、広報宣伝

国内外の観光行動が減少している厳しい状況の中、大阪を代表する文化・観光施設にふさわしい特別展、テーマ展及びイベント等を実施するとともに、ホームページ・ポスター・チラシ・リーフレット(日本語、韓国語、中国繁体字、中国簡体字、英語の各言語別及び子ども向け)・マスメディア等をとおして、幅広い効果的な情報発信・広報宣伝を行うことにより、一層の集客力の向上に努めた。

7. 来館者サービスの向上

改札・インフォメーションにおける外国語対応及び音声ガイドシステムの拡充ならびにリーフレット、館内サイン、文化財展示解説などの外国語表記にとりくみ、館内案内の充実を図った。また、昨年度より導入した大阪歴史博物館とのセット入場券については両館で20,163枚を販売し、来館者サービスに努めた。

8. 施設の維持管理

改札・案内・警備・清掃・昇降機の運転業務を業務委託により実施するとともに設備等の定期的な保守点検を実施し安全で快適な施設の維持管理に努めた。

9. 自主事業

(1) 史跡の活用・普及事業

重要文化財に指定されている城内古建造物の特別公開を行うほか、訪れた人々が大阪城や大阪の歴史・文化を身近に感じていただけるようなイベントを季節ごとに開催し、大阪城の魅力を高めるとともに集客に努めた。

① 天守閣復興80周年記念イベント

- a. 「大阪城ファミリーフェスティバル2011」(平成23年5月3日～5月5日)
- b. 「大阪城七夕まつり」(平成23年7月2日～7月3日)
- c. 「大阪城夢祭2011」(平成23年11月3日～11月13日)
- d. 「迎春イベント」(平成24年1月2日～1月3日)

② 姉妹城・友好城郭連携事業

エッゲンベルグ城との友好城郭連携3周年記念事業として、「大阪城・エッゲンベルグ城友好城郭提携3周年記念 大阪城天守閣・大阪歴史博物館合同自主企画特別展日欧のサムライたち—オーストリアと日本の武器武具展—」を開催した。

(2) 大阪城天守閣売店の運営

天守閣売店は、毎月売店会議を開催し効率の良い運営及び経費削減に努めるとともに、

ホームページを活用し、季節ごとの売れ筋商品を紹介する等広報活動を充実させ収入確保に努めた。

(3) 大阪城天守閣復興 80 周年記念事業

大阪城天守閣は昭和 6 年（1931 年）に市民の寄付金によって復興され、平成 23 年 11 月 7 日で 80 周年を迎えた。この 80 周年を記念し、年間をとおして各種事業を展開し、80 周年を来城者とともに祝い、より一層大阪城の魅力を高め集客に努めた。

① 展示<再 掲>

大阪城天守閣復興 80 周年記念 特別展「天守閣復興」

(平成 23 年 10 月 8 日～11 月 23 日)

② イベント<再 掲>

a. 「大阪城ファミリーフェスティバル 2011」(平成 23 年 5 月 3 日～5 月 5 日)

b. 「大阪城七夕まつり」(平成 23 年 7 月 2 日～7 月 3 日)

c. 「大阪城夢祭 2011」(平成 23 年 11 月 3 日～11 月 13 日)

d. 「迎春イベント」(平成 24 年 1 月 2 日～1 月 3 日)

③ シンポジウム・フォーラム

「大阪城天守閣復興 80 周年記念学術シンポジウム『大阪城天守閣復興の意味を問う』」を開催したほか、「大阪城天守閣復興 80 周年記念フォーラム『新説！！真説！？珍説？？大坂城と豊臣家と大坂の陣』」(平成 23 年 7 月 13 日)、「大阪城天守閣復興 80 周年・大阪歴史博物館開館 10 周年記念シンポジウム『秀吉の大坂城と城下町—首都大坂の時代—』」(平成 24 年 11 月 5 日)、「大阪城天守閣復興 80 周年記念フォーラム in 東京『大坂城・大坂の陣と浅井三姉妹～豊臣家と徳川家に生きた女たち～』」等に講師を派遣した。

○「大阪城天守閣復興 80 周年記念学術シンポジウム『大阪城天守閣復興の意味を問う』」

・開催日：平成 23 年 11 月 23 日（水・祝）

・会場：大阪歴史博物館 講堂

・パネラー：木下直之氏（東京大学教授）・能川泰治氏（金沢大学准教授）・酒井一光（大阪歴史博物館学芸員）・宮本裕次（大阪城天守閣主任学芸員）

・内容：昭和 6 年復興当時の時代背景、復興が社会に与えた影響、城郭の歴史への位置づけ、近代建築物としての魅力など、多様な観点から復興天守閣の価値や意義について解明した。

8 法人の連携事業等

協会各館・研究所が相互に連携した事業、外部の関係機関と連携した事業、協会としての広報活動、さらには事業評価や学芸員の資質向上に取り組むために設置された事業企画課では、これまでの博物館連携に加え、市大との包括連携協定に基づくシンポジウム、講演会などの事業を実施し、また文部科学省からの受託事業の実施や、大阪城天守閣・大阪歴史博物館との特別展「日欧のサムライたち—オーストリアと日本の武器武具展」を開催するなど、平成22年度よりもさらに多様な連携事業の展開を行った。

1. 協会独自の連携事業

平成23年度末の大阪城天守閣、大阪歴史博物館合同自主企画特別展「日欧のサムライたち—オーストリアと日本の武器武具展」は、協会所管の複数館による初めての合同企画特別展となった。平成18年にオーストリアのエッゲンベルグ城において発見された豊臣期大坂図屏風を契機に大阪城とエッゲンベルグ城の友好城郭提携3周年を記念して開催した。この展覧会については、重複のない広報を行うため事業企画課で共同広報を担当し、2館の調整を行いつつ、チラシ・ポスターのデザイン作成、マスコミとの連携などを行った。インパクトの強いポスターを作成することができ、展覧会の周知に貢献できた。合同企画展などの協会所管施設・研究所による連携事業を進めることで「博物館群」のアピールに努めた。

博物館での新たな事業展開を探るため、民間事業者との新たな事業連携をめざして平成22年度に実施した、大阪産業創造館のビジネスパートナー募集事業では154社389件の応募があった。その後、書類審査と面接を経た結果、大阪歴史博物館の『えんそくのしおり』の発行など、事業実現に至ったものがあった。

また、ジュンク堂大阪本店で5月22日～7月31日にかけて、館以外での販売されることの少ない各館・研究所の図録、報告書の販売を行い、図録を通じて博物館への関心を高めてもらう機会とした。会場では、同時に各館・研究所のパネル展示を実施し、協会のPRに努めた。

2. 大学連携

平成23年3月25日、活力ある地域社会の創造、人材育成及び学術文化の向上発展に貢献することを目的に、大阪市立大学と包括連携協定を締結した。この協定に基づき、国際博物館の日に因んだシンポジウム「知の融合—町人学者のまち大阪と博物館・大学」や、包括連携記念シンポジウム「秀吉の大坂城と城下町—首都大坂の時代—」を開催した。後者は外部からも講師を招き、371人の参加者を得ることができた。また、市大市民講座へは、2回2人の講師を派遣した。市大の都市問題研究にも学芸員が参加している。

また、学生等を対象にキャッシュレス入館ができる「キャンパスメンバーズ」制度を当協会の5館と大阪市立科学館で導入し、23年度は大阪市立大学と大阪大学の2校の参加があり、市大1,839名（うち協会5館1,110名）、阪大2,360名（うち協会5館1,233名）の入館者を得ることができた。

3. 学校連携

子どもたちに博物館の魅力を知ってもらい、学びの場としてより活用してもらうため、学校連携を行った。平成 22 年度にひきつづき、各館の小中学校の入館状況や学校関連事業の調査を行い、各館の傾向を分析した。また教育委員会指導部や校長会に対して博物館活動の広報を行った。市立美術館の特別展「岸田劉生展」では小学生を対象とした鑑賞会を実施したところ、4校 290 人の参加を得、館長の解説により親しく美術に触れる機会を設けることができた。

4. 80N 等の外部との連携事業

「80N (エイトオン)」(協会各館に大阪市立科学館、天王寺動物園、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室を加えた 8 施設)連携事業は、市民向け連続講座(9回)や共同キャンペーンとしての「ミュージアムウィークス大阪 2011」を実施するとともに、各館の事業とリンクした伝統芸能の鑑賞やこども向けワークショップなどの文化連携事業を計 13 回、開催した。また、80N ニュースやポスター等の掲出、「ミュージアムガイド 2011」作成による広報活動などを展開した。他に、大阪市教育委員会の「生涯学習情報発信ウィーク」への出展、大阪市経済局の「大阪卸売業の今昔」への参画などを通じて、博物館群事業の PR に努めた。

5. 文化連携事業

今年度は落語や音楽会など 13 事業を行った。特別展に合わせた歴博の「モダン大阪音楽会」や東洋陶磁美術館の朗読会なども好評であり、新たな来館者の獲得にもつながった。

6. 研修と LED 照明の導入

外部から講師を招いた研修を実施し、学芸員の資質向上に努めている。平成 22 年度には LED 照明を先駆的に導入した根津美術館から講師を招き、LED 照明導入の効果、課題などを話していただいた。各館とも LED 導入を控えていた時期であり、各館共通の参考となる情報を得ることができた。そしてこのことが基礎となり、23 年度には 5 館において検討が進められ、LED 照明の導入が各館で実現した。

7. 情報発信

上記の連携事業や法人全般に係わるさまざまな情報を迅速かつ効果的に発信するため、昨年度作成した協会ホームページの更新を行い、情報発信に努めた。アクセス数は、22 年度は月平均 1,400 件であったが、23 年度は 1,700 件と増え、1 年を通じたアクセス数は 20,595 件であった。各館の HP アクセス数を合わせると年間 220 万件を超えた。また、協会の事業概要を記したパンフレットを作成したほか、平成 23 年度末には協会広報誌「てくぱく」を発行し、協会各館の平成 24 年度前期の展覧会情報の共同広報を行った。

8. 外部評価

平成 22 年度にひきつづき、事業における効果の検証とそれによる一層の内容充実をめざし、各館が実施する特別展・常設展示等の事業を対象に、外部評価を実施した。評価は、定量・定性の両面から共通の指標に基づき内部評価（自己点検）を行い、その結果に対して外部委員から評価を受けた。昨年度は各館の特別展を対象としたが、今年度は常設展やイベントにも評価の対象を広げ、大阪文化財研究所の街角ミュージアムも評価対象とした。

9. 外部資金獲得による事業の実施

競争的資金である文部科学省の「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」の受託事業を実施した。テーマは「都市における「食」と生産地の「生物多様性」の2つの課題をむすびつける教育実践研究」とし、関心を持ちやすい「食」を切り口に、実際に食材を食べながら、博物館の外でレストラン、喫茶店を用いて少人数での講演会を実施し、生物多様性や食糧生産地について考えてもらうきっかけとした。事業は、自然史博物館を中心に歴史博物館、美術館が連携し、講演会やシンポジウムなどを 10 回にわたり実施した。各講座はインターネットで同時中継を行い、現地の参加者以外にも多くの視聴者を獲得することができた。これは今後の博物館事業の館外での展開を図る際のモデルとなる事業といえる。事業の成果は『うまいもんから考える自然の恵み』という冊子にまとめ、市内各小学校、市内図書館、博物館に配布した。

また、文化庁による「平成 23 年度文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」の補助を受け、「地域の博物館や文化資源を活用した「上町台地」の魅力発信による観光振興・地域活性化事業」を実施した。大阪歴史博物館・大阪文化財研究所を中心に「なにわ活性化委員会」を結成し、AR（拡張現実）技術による展示ガイドシステム「AR 難波宮」をはじめ、難波宮関連事業などを多くの市民団体とも連携して各種事業を展開することができた。実施事業の中でも、上町台地の歴史や自然にかかる情報を収集して制作したインターネット上の歴史・文化財見学ガイド「なにわ まナビ ガイド」については、協会の 1 所・5 館を含む本市博物館群と地域の関係団体が連携して実施する文化資源活用事業となった。

以上の協会内、あるいは外部関係機関を含めた連携を通じて、単独館ではできない事業内容の充実、幅広い分野・方向からの情報提供、各館から他館への回遊性の向上など、相乗効果を引き出すことができた。また、大阪市立大学との包括連携、民間企業との連携、外部評価を通じて、外部（第三者）の意見やニーズに接することができた。今後はこれらの成果を各事業の運営に反映させることで、さらなる内容の充実に努めたい。